

近代諸科学から見た
インド思想の批判的分析

平成元年度特定研究報告書

インド伝統文法学をめぐって

平成2年3月

後藤 敏文

インド伝統文法学をめぐって

後藤敏文

1. いわゆるサンスクリット文法学はパーニニ Pāṇini の著作、Aṣṭādhyāyī アシュタードゥヒヤーイー 「8章からなる[書]」(aṣṭa は「8」、adhyāya- は「学習, 課」, 「8課からなる」意の形容詞の女性形. B. C. 2C. のパタンジャリ Patañjali 以来この呼称が見られる)をもって、極度に抽象化の進んだ、一種の完成した体系として、いきなり歴史に姿を現す。パーニニの年代についてはなんら直接的証左は無く、相対的に位置付けることしかできないが、一般に、およそ仏陀と同じ頃、紀元前4世紀前半か、あるいは、これより少し古い時代が考えられている。世界史的に見れば、アテーナイにアリストテレースが出たより幾分古い絶対年代の出来事である。言語の上からは、ブラーフマナ Brāhmaṇa 文献やウパニシャッド Upaniṣad 文献の古いものよりも画然と後、更にはシュラウターストウラ Śrautasūtra と呼ばれる祭式遂行の綱要書の中、比較的古い層のものが編まれた頃より後の(家庭祭事を扱うグリヒヤーストウラ Grhyasūtra の成立に幾分先行する?)時代が最も妥当すると思われる。パーニニは、ほぼ同時代のヴェーダ文献が正しい、ということは保守的な、言語が保たれていたと伝える北西インドの、シャラートウラ Śalātura (現パキスタンの Peshāwar 東方、川の合流点 Attock 付近)の出身で、従って、当時アケメネス Haxamāniš 朝の支配下にあった地域の知識人である。いずれにしても、仏教が興起した地方とは社会的環境を異にしたと考えられる。名はもともと商人出身の家系を思わせるが、バラモン Brāhmaṇa 階級に属した筈である。

パーニニ以後、インドの伝統は独立の学術分野として営まれ今日に及ぶ。このインド「土着」文法学が「世界史」に登場するのは、世に言う「サンスクリットの発見」と、これを契機として成立した(インド・ヨーロッパ語)比較言語学の誕生の時代、即ち18世紀末のことである。インド伝統文法学はこの新しく生れた人文科学の(輝かしい)一分野 Disziplin の形成に本質的役割を果たした。即ち、語根-語幹-語尾その他の分析法、音韻の分類・排列、Ablaut と Resonant (サンスクリットには母音の r が存在する)などの方法や概念は Bopp 等

に摂取・咀嚼せられ、比較文法学及び近代文法学の成立を促したのである。

伝統文法学は、その後は、インド学（古典インド文献学）の一専門分野に止まり、研究・出版・注解の進展を見つつも、言語学一般の分野で関心の対象となることは殆ど無かった。この様相が変化するのは今世紀の後半になって、言語の記述や歴史的説明とは別に、人間の言語及び言語活動そのものに対する理論的研究が前面に出る様になってからである。この新しい傾向の中で、パーニニは言語学者の一人、言わば Fachkollege として扱われ、彼の文法体系そのもの、その背景にある方法論・理論などが関心の対象となって来た。なるほど、「構造主義」乃至構造主義的なものを、解り易くソスユール Saussure という Parole を援用して、言語を、その歴史の変遷の過程に於いてではなく、ある時点での「共時的」体系の下で、「パロール」 parole ではなく「ラング」 langue を対象に、その一般的な構造の分析を主眼として、考察する営みにある、と考えれば、パーニニの文法を構造主義的基盤に立つものと了解し得るし、パーニニを最も模範的な構造主義者と呼んだ学者もある程である。しかもその完成度はブルームフィールド Bloomfield をして、『パーニニの文法は人類の知性の最も偉大な記念碑の一つである。それは著者自身の言語のあらゆる活用・派生および複合語の形成を、そしてあらゆるシンタクス上の用法を、最も微細な細部とともに記述する。今日に至るまで、他のいかなる言語もかくまで完璧に記述されたことはない』と書かせた底のものである。

2. 古代インド社会では、祭官の果たした役割の大きさと相俟って、言葉が重要な機能を担っていた。古インド・アーリヤ Indo-Arya 語（広義で用いられた場合の「サンスクリット Sanskrit」）で言葉を *vāc*-ヴァーチュ（女性の語根名詞； =ラテン語 *vōx*, *vōc-is*）というが、神格化された女神 *Vāc* には最古の讃歌集リグヴェーダ *Rgveda* の新層に於いて一讃歌 (X 125) が捧げられている。それに拠れば、*Vāc* は他の神群とともに歩み、神々を担い、あらゆる所に広がり、入り込み、遍在する。人間たちはあらゆる行動の中に、それと知らずに言葉に依存し、言語は様々な能力を現す。最後の一節を直訳する：『私 (*Vāc*)こそは 風の如く 吹き進む、 全ての(諸)世界を捕まえながら。 天を越えて この大地を越えて、 偉大さに関して(私は)これ程のものとなっ

た』。言葉によってものを捕える・把握する、という考え方・表現は後のインド思想史に連綿と続く言語を巡る哲学論争の序奏をなす意味でも注目されてよいと思う。リグヴェーダ X 71 の「知識の歌」も事実上言葉への讃歌であり、言葉と、それに附随する諸概念はリグヴェーダに於いて、そしてそれ以後も、重要な役割を演じている。

祭官たちを祭官たらしめている力はブラフマン *bráhman-* である。*bráhman-* は、もともと、正しい、形式にかなって綴られた言葉の持つ力・エネルギーを意味したと考えられる。後にウパニシャッド *Upaniṣad* 文献に於いて、宇宙原理、『梵我一如』の梵になったこと、周知の通りである。このような正しく綴られた言葉、即ち、ヴェーダの詩句やその他の定句などを正しく発する時には、その言葉は実現力、乃至、呪力を発揮する。ブラーフマナ *Bráhmana-* (これももともと「ブラフマンに関する」を意味する、*bráhman-* からの派生名詞〔意味的には形容詞〕で、祭官階級を意味する *Bráhmaná-* [バラモン] < *brahmán-* とアクセントを除いて同形である) と総称される祭式の解説・論証文献に興味深い挿話がある：*Ivaṣṭṛ-* トゥヴァシュトゥリが自分の子を殺した *Indra* インドゥラを倒そうとして、*Indra* の飲み残した *Soma* ソーマ(詩人や戦士を興奮させ、鼓舞した植物 - おそらくは麻黄 *Ephedra-* の搾り液、イランの *Haoma*) を媒体として *Indra* に対する魔術を行う。即ち、これを火中に投げ、「おまえは *Indra* の仇敵として成長せよ」と唱える。その際、*Ivaṣṭṛ-* は *indra-śátru-* または *indra-śátrú-* 「インドゥラの仇敵」と言うつもりを、おそらくは興奮の余り、誤って *índra-śátru-* と語頭にアクセントを置いて唱えてしまった。この場合、ヴェーダ語の複合語のアクセントの法則から「インドゥラを仇敵とする」という形容詞の意味になる。そこで *Indra* を打負かす *Indra* の仇敵(およそ天敵くらの意)が出現する筈のところ、*Indra* 自体を天敵に持つものが出現してしまい、言葉が無効となってしまった、とテキストは語る。この時出現し、成長してきたのが *Indra* が退治して有名な魔物 *Vṛtra* ヴリトゥラ(もとは「障害」を意味する中性名詞。竜=蛇 [Ahi アヒ] 退治の神話と融合して、水を囲い込んでしまう魔物と考えられた)である。この最古の散文(ヤジュルヴェーダ・サンヒター *Yajurveda-Samhitā* の散文部分)を以て語られる神話はブラーフマナ文献群に伝わり、パーニニ学派文法学の大成者パタンジャリ *Patañjali* (B.C. 2 C.)

は彼の注釈書マハーブハーシャ Mahābhāṣya の序文に文法学習の必要性・意義の論拠の一つとして援用している。

当時の祭式思想一般の（そしておそらくは古代インド世界一般の）世界観に於いて、「言葉」は他の具象・抽象の諸概念・要素と並んで一種のエネルギー体・エネルギー物質と考えられていた。例えば、祭式の中に組み込まれている儀式化された神学的討論の後では、討論で「言葉」が消費されてしまっているため、沈黙によって再充填し、しかる後、次の段階へ移行する、という記述がブラーフマナ文献に見られる。

言葉、それも正しい言葉が重要な意義を持っていたこの様な世界観を背景として、韻律に関する知識などと並んで、当然正しい言葉の最重要構成要素といえる文法に対する意識・関心、そして知識も古くから相当程度進んでいたことが想像される。上に引いた *indra-śatru-* の話はこの点で示唆的であるし、事実、断片的に発音に関する考察などがみられる。また、語源（あくまで独特の神学的語源学であるが）に対する知識は祭式の成就に不可欠のものとなっていた。リグヴェーダの詩句を単語に分割したシャーカリヤ Śākalya もパーニニに先行する時代の学者である。

パーニニの文法の背景に祭式的世界観や神秘的なものを探る試みはこれまでになされてきた。しかし、パーニニ自身の文法規則の著述の中には、直接言語の形式面とそれぞれの機能の記述を離れた思弁的な要素は全く認め得ない。敢えて無味乾燥に止まらないものを捜せば、彼の書の冒頭と末尾とが注目される程度である。即ち、彼は彼の規則 (*sūtra-* ストウラ 「糸」) を、母音 *ā, ai, au* を纏めて *vrddhi* と呼ぶ、という母音グループの定義 (*vrddhir ād aic*) を以て始めるが、*vrddhi-* はもともとは「増大」の意味であり、著作の成功・繁栄を図って吉祥の語を始めに置いたものと注釈せられ、古典インドの著作作法の先駆をなす。また、事実上の末尾をなす規則の中では、「後続する」の意味で他の箇所でも用いられる *para-* の代りに *udaya-* なる語を使用している。*udaya-* は一般には「上昇、栄達、出口」を意味し、これも吉祥の語を末尾に配する為の工夫であると注釈家は指摘し、一般にそう解釈されている。

パーニニは文法学の意義を語らないが、パーニニの規則を注釈・改補、乃至、注解・正当化した、カトヤーヤナ *Kātyāyana* (B.C. 3 C.) とパタンジャリ

Patañjali (B.C. 2 C.)とは文法学を学ぶことの意義・徳・動機付けを行っている。殊に後者の大注解書 Mahābhāṣya マハーブハ、ーシャの序文はヴェーダからの引用とその(文法学派的)解釈、金言などを混じえ、検討に値する。困みに、この三学者を文法学の三聖と称する。

3. 古インド・アーリヤ語(=広義の、または俗にいうサンスクリット)で「文法」乃至「文法学」を vyākaraṇa- ヴァーカラナと呼ぶ。この語はパーニニ自身には見られないが、パタンジャリでは定着した用語であり、新しいウパニシャッドにも現れる。vi は「離れて、引離して」を中心の意味に持つ接頭辞であり、ā は「こちらへ、そこまでずうっと」を意味の核とする接頭辞(及び前置詞)であり、karaṇa- は語根 kar/kr 「する、作る」から造られた行為名詞「すること、作ること」である。この複合語がどのような意味で「文法学」と理解されるのか、についての諸説はおよそ四説に纏められる。先ず、動詞 vy-ā-kr の「引離す」という意味から出発して「分析」Analyse と考えることが一般に行われる(cf. vyākaraṇena hi padādivibhāgaśa ṛgvedādayo jñāyante 「何故なら、文法学によって、単語等の分割に基づき、リグヴェーダ等[の諸ヴェーダ]は理解されるのだから」。Śaṅkara ad vedānāṃ vedāḥ, ChāndogyaUpaniṣad VII 1,2)。次に、vy-ā-kr の「あるものからものを様々に形成する・展開させる」の意味に基づき、「派生、展開」とする説がある。確かに、パーニニとその伝統の学は語の派生の仕方を教えることを主眼とする文法学である。第三に「弁別・識別」から出発することも可能であるし、これから進んで(ヴェーダ文献にはこの意味での用例はまだ出ないが)「説明」とする考えがある。「説明」はまた(atha vā)、「具体的に解きほぐすこと；解きほぐして説明すること、すなわち解説すること」からも導かれる(cf. 質問に対して具体的な答えを与えるという意味での vy-ā-kr；仏教の経典ジャンルとしての Vyākaraṇa 『授記』)。

4. パーニニが記述し規定した(より正しくは：その派生文法の対象とした)、そしてその伝統が規範とみなす言語を一般にサンスクリットと呼び、過去分詞 saṁ-skṛta- に由来する。用例自身は、但し、叙事詩ラーマヤナ Rāmāyaṇa の saṁskṛtā- vāc- が初出のようである。saṁskṛta- の意味の中心は

「正しく形造られた、整えられた；整った、純正な」あたりにあると思われる。パーニニは当時の教養ある人士（śiṣṭa-）の正しい言語を中心に、多少の幅をもって（特に話し言葉専用のもの、ヴェーダ聖典の語〔法〕、地方的変異形、他学者の説）、収録・記述し、規範を作った。

5. Aṣṭādhyāyī 本体はI章が術語の定義、解釈・規則適用上の原則；II章が複合語と名詞の格に相当するもの（パーニニ学派の文法は文の表現の中心を動詞に置き、名詞の格にあたるものは、文意の中核をなす動詞の表示する行為〔動作・状態〕への関与要因として捕えられている；これを *kāraka-* と言う）；III章が一次接尾辞（*ḥt-*）による名詞造語法、および動詞造語法；IV-V章が二次接尾辞（*taddhita-*）による名詞造語法；VI-VII章が派生過程での音韻変化、アクセント；VIII章はその他の問題をおおよその中心内容とする。ただし、パーニニの文法は、後に触れる様に、文法カテゴリーを立てて各項目ごとに事項を記述するものではなく、同一平面上に並んだ規則を厳密な適用原則に従って適用し、語根から具体的語形を派生・完成させる所に本領があるので、ある部分を取上げて検討してもそこになにか纏まった文法カテゴリーの内容検討が見られるというものでは必ずしもない。各章はそれぞれ4つの節 *Pāda* 「四分の一」からなり、総計4000弱の凝縮された規則がある。

この本体（*Sūtrapāṭha* スートゥラパート、^ハ「糸＝規則、の誦み、規則表」）の前に本体と密接に連動する音韻分類一覧表（*Akṣarasamānāya* 「音節の伝承」）がある。これは、音韻の、上位・下位の各グループ、例えば全母音、全子音；複合母音、半母音；有声氣息音、無声氣息音etc.etc.、に属する音韻の全てを、必要に応じて引括めて取出すことができる様、符号が設備されている所から、その設備にちなんで *Pratyāhārasūtra* 「一括取出しスートゥラ」、またシヴァ神によって齎らされたという後世の伝説に基づき *Maheśvarasūtra* または *Śivasūtra* とも呼ばれる。

更に、附随する文献として、語根表 *Dhātupāṭha*（現在語幹の形成法に従って10類に大別されている。*dhātu* は厳密には現代の文法学でいう語根とは一致しない点があって、本報告者は動詞語基 *Verbalbasis* の語を提案したい）、動詞語根からの派生によっては導かれない、既製の名詞語幹を集めた *Gaṇapāṭha*

「〔語〕群表」（それらの名詞語幹から、更に二次派生を規定する場合に必要）があり、パーニニの「規則表」はこれらを予定する。

6. 次に、具体的にある語形がパーニニの規定によってどの様に導き出されるか、大略を見ることによって、パーニニ学派派生文法の実際の性格に触れるよすがとしたい。先ず、動詞の代表として *pácati* 「彼は調理している」（3人称・単数・現在・直接法・能動態）を見てみよう。語根 *pac* は動詞語基表中、第I類の1045番目に *ḍupacàṣ* (*ḍu-pac-à-ṣ*) として挙げられている。頭に付いている *ḍu* はパーニニのある規則に基づいて *pak-tri-ma-* 「調理により生じた」という特殊な名詞（名詞＝実体詞＋形容詞）の派生を教える為に設けられている符号 *Anubandha* であり、今の文脈には関係しない。末尾の *ṣ* も同様に行為名詞の派生が *pakti-* ではなく *pacā-* であることを導くのに必要な *Anubandha* である。*à* が付せられているのは、先ず、そのアクセントの為である。このアクセントの型（一音節の中に上行と下行のあるアクセント）が *Anubandha* の上にある場合には当該動詞が能動態 *Aktiv* と中動態 *Medium*（行為の結果が何らかの形で行為者自身に係わる場合）の両方に活用することがパーニニの規則に規定されているので、その規定の為の設備である。また、パーニニの規則は厳密に適用されるので、この *a* が無かった場合には、（別に特別な規則を作っておかない限り）ある規則に従って語根末の子音（この場合 *c*）が消滅してしまうので、これを防ぐためにも必要な措置といえる。それ以外には *a* 自体には機能は無い（他の母音が用いられれば更に別の機能を担う）。語根 *pac* の上にはアクセントが無いが、このアクセントの不在は、一連の、子音で始まる動詞的／名詞的接尾辞の前に現れることのある *-i-*（これは本来印欧祖語段階での *Laryngale* を主要な起源とする）がこの語根には現れないことを示す。

さて、この動詞語基表の *ḍupacàṣ* を出発点として *pácati* を導く訳であるが、簡略のため、諸 *Anubandha* が消去される過程とアクセントを無視することにする。パーニニの規定の第III章、第二節の123番目（III 2, 123）に、現在進行中の意味で *laṭ*（結果的に現在の人称語尾を意味する事になる）が来る、というものがある。*pac + laṭ* となるが、複数の規則の作用の下に、結果だけ言えば *pac-l* という形が得られる。次にIII 4, 78によって、またしても複数の規

則の作用の下に、I が3人称・単数・現在・直接法・能動態の語尾 ti に置換えられて pac-ti が得られる。更にIII 1,68の「行為者の意味で śap」により、結論だけ言えば pac-a-ti に到達する。この語の場合には、音韻変化の規則の適用は不要である。

この例ではあまりに実態を掛離れて大略にすぎるので、また他方、厳密な手続きを本当に追うことは専門家にしか為し得ず、現報告者の能力を越えているので、いくらか現実に近いイメージを得てもらおうべく、八木徹の博士論文 *Le mahābhāṣya ad Pāṇini 6.4.1-19*. Paris 1984 の巻末にある *Index analytique* から akārṣīt 「彼は [今] 為した」(3人称・単数・s-Aorist・能動態) [p. 125], 及び、vr̥trahanau 「二人のヴリトゥラ殺しが/を」(男性・双数・主格/対格) に関する規則適用次第の要約 [p. 138] を転写する。第二の例は vr̥tra-hán- という名詞複合語を問題としているが、その後肢は -han- という語根名詞である。今日では語根がそのまま名詞語幹として機能すると考えるが、パーニニの派生体系では、-han- が行為者名詞である機能を導き出すべく、消去を運命付けられている接尾辞 -v- (符号をともなって kvip) が一度添加された上で消える (lopa-) 手続きが注目されるかも知れない (いわゆるゼロ-Suffix)。引用中に dh. 8.10 とあるのは動詞語基表 Dhātupāṭha の第VIII類の第10番を意味し、他の数字は Sūtra 番号を意味する (3.2.110 は我々の III 2,110 に当たる)。

- akārṣīt (3. sg. act. aor.)..... sū.6.4.1
 kṛ- (dh.8.10, B. « anudāttaḥ »).
)kṛ-l (3.2.110, -l<luṅ> 1.3.2, 3 & 9, ṅ-it, « dhātoḥ » 3.1.91, <dhātu> 1.3.1).
)kṛ-ti (3.4.78, -ti<tip> 1,3.3 & 9, <sārvadhātuka> 3.4.113, <parasmaipada> 1.4.99).
)kṛ-t° (3.4.100, « lopaḥ » 97, <lopa> 1.1.60, « dhātoḥ » 3.1.91).
)kṛ-l-t (3.1.43, -l<cli> 1.3.7, 2 & 9, *apavāda* de u 3.1.79, <ārdhadhātuka> 3.4.114, « dhātoḥ » 3.1.22).
)kṛ-s-t (3.1.44, -s<sic> 1.3.2, 3 & 9, -i-<iṭ> 7.2.35 inapplicable selon 7.2.10).
)kā-s-t (7.2.1 conf. à 1.1.50, <vr̥ddhi> 1.1.1, « ikaḥ » 1.1.3, « aṅgasya » 6.4.1, <aṅga> 1.4.13, *tadantavidhi* 1.1.72, *antādeśa* 1.1.52, <iḥ> 1.1.71).
)kār-s-t (1.1.51, « raparaḥ », <aṅ> 1.1.71).
)a.kār-s-t (6.4.71, a-<aṭ> 1.3.3 & 9, ṭ-it 1.1.46, « aṅgasya » 6.4.1. A l'égard des accréments a- et ā- il y a deux thèses, à savoir, 1) vikaraṇaviśiṣṭasyāṅgasya « aḍ » āgamah et 2) lāvasthāyām eva « aḍ » āgamah).
)a.kār-s-i-t (7.3.96, -i-<iṭ> 1.3.3 & 9, ṭ-it 1.1.46, « aṅgasya » 6.4.1, <apṛkta> 1.2.41).
)a.kār-ṣ-i-t (8.3.59 conf. à 1.1.50, « mūrdhanyaḥ » 8.3.55, « iṅ-koḥ » 57).

- vṛtrahaṇau (Nom./Acc. du. mas.)..... sū.6.4.12-13
 han- (dh.2.2)
 >vṛtra-as han-u- (3.2.87, -v(kvip) 1.3.8, 2, 3 & 9, dans le sens « vṛtram hata-vān », « bhūte » 3.2.84, « karmaṇi » 86, « dhātoḥ » 3.1.91, <dhātu> 1.3.1, <pratyaya> 3.1.1, <upapada> 92, <kṛt> 93; ṣaṣṭhī cf. 2.3.65. La voyelle longue 6.4.15 ne se réalise pas parce qu'à l'égard de la voyelle longue fondée sur la pénultième il y a limitation — 6.4.12 et 13 — qui entre en vigueur devant tout suffixe).
 >vṛtra-as han-^o (6.1.67, « lopaḥ » 66, <lopa> 1.1.60, <apṛkta> 1.2.41).
 >vṛtra-as-han- (2.2.19, <samāsa> 2.1.3 conf. à 4.1.48 vt.4, <tatpuruṣa> 2.1.22).
 >vṛtra-^o-han- (2.4.71, « luk » 58, <luk> 1.1.61, <sup> 71, <prātipadika> 1.2.46).
 >vṛtra-han-au (4.1.2, « au » /-au <aṭ> 1.3.3 & 9, <prātipadika> 1.2.46, <pratyaya> 3.1.1. La voyelle longue 6.4.8 est inapplicable selon 6.4.12 et 13).
 >vṛtra-haṇ-au (8.4.12, « ṇaḥ », <prātipadika> 1.2.46, a et h : <aṭ> 1.1.71).

7. 以上の例によっていくらか印象が得られることを期待するが、パーニニ文法の基本は、何らかの機能・意味を担う接尾辞・語尾等の要素を順次添加し組合せ、それらの機能・意味の有機的結合の上に得られる表示内容に対応する個々の表示物、即ち語形を導出す、という派生過程にある。「サンスクリット」の単語の構造そのものが直接分析可能な、乃至は分析に適した形態を有っており、この分析が派生文法の背後にあつて基礎をなす。まさにこのことが、結局、近代的比較文法の成立を可能ならしめた（あるいは、少なくとも格段に早めた）のである。

記述テクニックの基本としては、この添加・派生ということと並んで、ある要素・部分がある別の要素・形に置換えられるという置換え (ādeśa-) の原理が挙げられる。パーニニは a と i とが結合して e になる、とは言わずに、a と i の連続に代って e が来るといった風に説明する。先に挙げた例で見れば、paca-l の ^{ti}l が ti に置換えられて pac-ti が得られる。その際、l の表示する「現在進行中」という機能・意味はそのまま残り、-tiに受継がれることになる。

例えば語幹、アクセント、Ablaut（一単語内での、音節の母音階梯交替の現象。直接再建される印欧祖語に先行する段階で、アクセントのある母音 [主として e] が保持または延長され、それ以外の音節支持母音が変化または消滅したことを発端とする）等の諸概念とその機能は派生手続きの過程の中に出現してい

ることになり、パーニニ学派の文法は、アクセントなり語根重複 Reduplikation なりといったものを独立事項として取上げて、これこれの機能があるとか、こういう原理があるとかを分析したり検討したりするものではない。始めに文法事項の諸カテゴリーを列挙して目次を建て、例えば母音語幹の活用とか現在活用の種類・機能とかを、個々のカテゴリーに従って記述することはない。丁度、コンピューターを用いてある出発点から終着点まで、規則を組合せて辿る作業に比せられる。同一平面上で全体をやり繰りして行く。その際、一つの手続きに誤差があっても正しい最終語形に到達できない。

規則の適用順序が異れば違った終着点に行き着いてしまうことや、今適用される規則が建設中の語形のどの部位に対して働くのか、という領域設定が行われていないと機能しない、という点でもコンピューターを用いて作業をする場合と似ている。この種の手続きの次第に関する統轄規則についても厳密な規則が設けられており、一部はパーニニ自身が規定し、他は注釈家たちが明文化した。時に、例外を仮定しないと我々が求めている語形に到達しないと思われる場合が出てくるが、そういう微妙な場合こそ注釈家たち、そして伝統の流れの中に自らを位置付けている現代の研究者たちの研究対象（腕、乃至、頭の奮い所）を形成する訳であって、パーニニの、規則の排列順序や適用規則をも含めた全システムと個々の規則の全体とは、正確にして厳密な体系である、またはそのようなものと見なされる。法律や裁判の場合には、常識的結論とそれをにらんだ上での法律の運用ということがあるにしても、初めから判決結果が具体的な内容に至るまで解っていて条文を適用して行く訳ではない。これに反し、文法学の場合には語形とその意味という終着点・結論は（自覚、無自覚の諸々の度合いを含めて）解っているのが原則である。そうでない場合でも、せいぜい選択肢の中からどれがもっとも文法に適ったものかを選び出すような場合であろう。また、法律や裁判では、条文の適用の仕方が完璧でも、条文の整備自体に不備があれば好ましい判決に至らない場合が出て来ようし、その場合には法律そのものの改正が考えられるであろう。パーニニ学派の文法学の場合には、その極端な抽象性ということもあって、パーニニの規定そのものを改変したり補完したりすることは避けられた。（あるいは補正もなされたかも知れないが、パーニニの規則の中に埋め込まれてしまった。）勿論、パーニニ文法の完成度の高さも比類のものではあったろう。伝統

的文法学は、この様に、出発点と終着点とが予め与えられている中で、その中間の手続きの組立てを巡って営まれて来たと言える。

パーニニの規定には上に問題にした原理的規定の他に、それらからだけでは導き出せない個々の事例を念頭に置いた、各場面での個別規定、乃至例外規定がある。これらの規定は大体に於いて当時の実際の言語事実を反映しているものと考えられる十分な根拠があるが、それがどの程度まで網羅的なものであったかを検討することは今後の課題と思われる。いずれにしてもパーニニ自身は当時の言語の実態を全体として収録し、記述する意図があったものと判断され、この点後の「パーニニ学派」の伝統学芸の在り方との対比で確認しておく必要がある。

8. パーニニが意をくだいた点は、文法カテゴリーの分類整理とその機能の分析にあったのではなく、できるだけ短い規則 (sūtra 「糸」) をできるだけ少なく作成して、その操作・適用によって「サンスクリット」が組立てられるように、というプログラミングであった。特筆すべきこととしては、この目的の為に種々の付加記号を発明し、それらを、例えば動詞人称語尾なら^エ「 」で始まる諸符号を採用するというような、字母の組合わせを工夫することによって、必要に応じてあるカテゴリーの全体を一度に、あるいはその中の特定の低位カテゴリーの一つ、あるいは幾つかを、一度に呼出せるように設備したことが挙げられる。このことはまた、彼が今日の文法で建てるような諸カテゴリーを、しかもその多層的構造の中で、区別・分類し、その機能を分析して知っていた、ということを示す。しかし、彼はこの前作業を書き残さなかった。先の pacati でいえば、我々は pac を語根、-a- をある機能を担った現在語幹形成の Suffix、paca-までを現在語幹、-ti を3人称・現在・直接法・能動態の意味を持った人称語尾、と分析理解する。パーニニはその個々の機能に当たるものを規定するにも拘らず、 残念なこと この分析自体の記述に意義を見出さなかった。パーニニ文法では、その目指す経済効率を優先するシステムの要請から、先ず pac + ti を先に作り、-a- をその後から入れる。勿論 -a- が入る位置については、これを指定する統轄規則の管轄下にある。パーニニ自身がこの操作順序を意図していたのかどうかについては本報告者には判断できない。少なくともパーニニの規則を出来る限り厳密に運用することに努めてきた注釈家の伝統はこれがバ

パーニニの意に適うものとして来たし、実際そうであろう。文法は多層的なものであり、多次元のできごとを対象とする。パーニニとその伝統はその全てをいわば一枚のハードディスクという同一平面の中に押しつぶし、一回に一度ずつの操作を行って、組合わせ、組立てていく方法を取った。

文法記述の方法は他にもあったであろうが、パーニニの敷いたこの基盤を離れて、別の手段を用いる試みは起こらなかった。B.C. 3 C.のカーチャーヤナ Kātyāyana はパーニニの規則を前提として、その不足を補ったり、一部改良を試みたらしい。その際彼は彼自身の知っている言語事実に合せて、より適合するように補正しようとしたものと考えられる。B.C. 2 C.のバタンジャリ Patañjali がパーニニとカーチャーヤナを取上げて吟味し、全体としてはパーニニの規則だけで全て機能するという方向での解決を与えた。精緻にして高度な論証はインドスコラ学の頂点を画するものであろう。ここにパーニニ学派の文法学は完成し、以後の注釈家たちはバタンジャリの難解な論証を追検証したり、彼の精神に添って更に精緻にすることを課題とした。ずっと後代になって、入門学習に不向きなパーニニの規則を普通の文法カテゴリーに添った順序に並び換え、学習向きに再整理した綱要書も作られたが、それとてパーニニの規則とその適用方法をそのままにして、ただ学習順序を改めたものに過ぎない。パーニニ学派以外にも他に幾つかの学派が出現し、幾つかの文献は今日にまで伝わるが、根本的に変わるものではない。

9. ここに、一つの当然の疑問が起こる。言語は地域・時代によって変化・変遷し、後のある文法学者の知っていた「サンスクリット」はパーニニの見ていたそれとは異なる筈である。事実、パーニニの予定するアクセントはヴェーダ時代のものであって、いわゆる古典サンスクリットのものではない。動詞の Konjunktiv (英 Subjunctive; 「接続法」) という話者の意志及び未来を意味するモードは古典サンスクリットでも叙事詩のサンスクリットでもカテゴリーとしては最早存在せず、ただ一部が命令形 Imperativ の中に取込まれて残るに過ぎないが、パーニニはこの範疇自体を規定し、—不十分とは思われるが— 過渡的時代に於けるその機能を記述している。それにも拘らずパーニニ文法自体はは改変を受けず、規範であり続けた。

その理由の一つには、インダ的体質と言えようか、一つの偉大な典型が出来

上がると、その枠内での、専門家内部での注釈・議論に終始する、という傾向が挙げられる。それも一般には注釈・講義の師資相伝 upadeśa-pāramparyam という形が取られる。専門家たちはパタンジャリの用いた例のみを議論の材料にし、自分たちの回りの生の材料を議論の中に持込むことをしなかったようである。あったかも知れないが、それが正統学芸の中に書留められることは例外であった。現実・事実よりも観念の中の出来事の方に、むしろ真の「実在性」を認め、思弁・論争を重んずるインド知識階級、及び、それに指導された社会が更に背景にあった。パーニニ自身は、明かに、彼にとっての標準的言語を中心に、彼の時代の「正しい」言語事実をできるだけ網羅的に収録・記述しようとした。だからこそ、標準的ではないが正しい、ヴェーダ聖典の言語 (chandas- 「雅語」；高低アクセントを伴って抑揚を付けて唱えられる所から来たものか、 cf. 語根 chand/chad 「現れる、心地好く現れる；気に入る」) や、地方型、他の学者の説なども、彼のシステムの個々の場面に追加する形で書留めたのであろう。カートヤーヤナも実際の材料の上に立って補正を試みたに違いない。パタンジャリの壮大なスコラ学がこの事情を変え、パーニニを不変・神聖なる規範としてしまった、と言える。ここに文法学は完成し固定された。

一方、パーニニの規則・方法自体もこの様な経緯に条件を提供しているように思われる。ここまで抽象化と凝縮の進んだ、説明の無い、純度の高い規則というものは、逆に解釈・運用に自由さを与えないだろうか。また、特定の語形のチェックに活用はできても、言語現象全体の説明・学習には不向きで、必要なものだけがこれから取られ、他の部分、例えばパーニニの教えているアクセントとか Konjunktiv の規定などは教令として機能せず、用いられずに、全く現実とは関係のない単なるスコラ学の議論対象に止めておくことを許すのではないだろうか。パタンジャリの解釈スコラ学がこうした傾向に根拠と方法論を与えてくれている。その上、この大注釈家の文章は抽象的・論理的な論証議論が主で、その本質からして難解である。このこともまた、現実という平面に対しては、ある種の適用の射程の広さを保障しはしないだろうか。始めは、目の前にある言語を対象として、その記述 (正確には、派生方法) を意識していたパーニニの諸規則は、パタンジャリにあってはその規則・操作・プログラム等の、いわば抽象的次元で問題にされ、材料たる言語現象そのものは関心の中心からやや外側に追いやられてしま

った、という印象を与える。

つまり、後の学識者たちは、実際には、パーニニの文法によって言語を習得したのではなく、パーニニの時代よりもずっと下った、幾重にも変遷を経た段階の言語を（それもおそらくは中期インド・アーリヤ語を身近に置きながら）用い、その上で、学識あるバラモンの義務としてパーニニ文法に単なるコントロール、チェックの権威的機能を — それも全体に互ってではなく — 与えていたのではないだろうか。しかもその場合のパーニニ文法はパーニニ学派の文法であり、当時の学芸継承者たる教師が講義している文法であって、既にその中には同様の経緯が潜み得たであろう。他方、パーニニ学派の文法学者たちの純粹に専門とするところの本領は伝統の枠内での解釈議論のスコラ学であり、極論するなら、その対象は言語そのものでも文法でもなく、文法の形をした解釈学の材料に過ぎない面があったであろう。

パタンジャリ以降、現存最古の注釈書カーシカー *Kāśikā Vṛtti* (A.D. 7 C.), ないし、ブハルトゥリハリ *Bhartṛhari* によるマハーバーシャに対する注解 (A.D. 5 C. 頃) が現れるまでの空白は、ことによると無視しえない意味を持つかも知れない。一般に、サンスクリット文化はグプタ *Gupta* 朝 (A.D. 320 以降約 200 年) 下におけるサンスクリット復興に因るところが大きい、伝統文法学もそうした気運の中で再発見され、何らかの形で伝承されていた学芸が再び脚光を浴びたものかも知れず、そのことが上述のパーニニの言語と所謂古典サンスクリットとの間の隔たりに関連する可能性は考えられてしかるべきであろう。

10. この様な人類の精神史上の偉業と称すべきパーニニの文法とその伝統の学芸分野を前にして、今日の研究者の為すべき事は何であろうか。

一つの行き方は伝統的スコラ学そのものを精緻・厳密に跡付けることである。この様な行き方の典型的な例は大地原豊、八木徹の仕事に見ることができる。その作業の核を成すのはパタンジャリの意図するところを正確・厳密に理解する、という点にある様である。この様な精密作業と並んで、S. D. Joshi と J. A. F. Roodbergen の遂行しているパタンジャリの大注釈書の通し訳の完成も望まれる。パーニニの規定の Paraphrase 的理解に先ず拠り所とされる *カーシカー Kāśikā Vṛtti* (A.D. 7 C.) の正確にして要を得た通し訳も期待される。

次に、George Cardona によって将に始められたパーニニ（学派）の文法を咀嚼した上での「文法」、即ち、言語記述としての、全体及び個々のカテゴリに互る解説作業があろう、cf. Pāṇini. His work and its traditions. Volume one. Background and introduction. Motilal Banarssidass (Delhi etc.) 1988. xxiv +671 pp. (全8巻が予定されている)。専門家以外の研究者が普段当然発する疑問、この文法事項はパーニニ文法ではどう説明されているのだろうか、この語形はパーニニ文法では正しいのだろうか、不規則と見なされるのだろうか、といった事柄がこうした作業によって検索可能になるとすれば、言語研究者とインド学者を益すること大であらう。

上記二点と関連して、パーニニ自身の意図、カートヤーヤナの、そしてパタンジャリの考え、それから、後の注釈家たちの寄与、のそれぞれを区別して検証する試みが必要となろう。その過程で、パーニニのストゥラ中に推定される後代の付加も検証・確認されるべきである。そのようなことが可能となっても先のことであろうが、また、あるいは全体としては不可能な要求なのかもしれないが、個々の術語や方法に関して、そのような研究が現れる様になって来ている。

第四に、以上の諸方面の研究に支持される必要があるが、パーニニの記述した言語を古インド・アーリヤ語の歴史的展開の中に位置付ける、乃至は、パーニニが目にしてきた言語をそれ以前のヴェーダの言語や、別の流れである叙事詩の言語等の観点の中に置いてみる（及びその反対方向）ことが挙げられる。この種の研究はこれまでも多くなされて来たのではあるが、十分な既存共有財となるまでには至っていないと言える。殊に、パーニニの挙げるヴェーダ語の例外規定について既に多くの成果が上っているが、ヴェーダ文献全体の単語インデクスが出版された現在、徹底的に調査・検証を行う必要があり、また成し得る。ただし本当のところは、例外として挙げられている規定以外の項目の検証が必要であり、そうなると上にあげた諸方面の仕事が前提となる。この点と関連して、パーニニ文法システムの基幹をなすコンピューター的規定と個別規定の間の位置付けの問題も考えられてよい。

第五に、パーニニないしパーニニ学派の文法理論・方法論の研究、及び、それらを通して知られる彼らの「言語」に対する理解の研究、いわばパーニニ文法についての一般言語学がある。この視点に立った研究は今世紀後半以降注目され、

行われてきたが、伝統文法自体の正しい理解に基づくか否か、という点で不備があったことは否めないし、十分な成果を齎したとは言えない。また、パーニニ文法は確かに時代を越えた異例の抽象度と高密度を示しはするが、一度歴史的背景の中に置いた上での比較、という奥行きも欠かせないのではあるまいか。例えて言えば「シャンカラとヘーゲル」の如き直接的な「比較」研究が具体的成果を齎すとは思えない。本特定研究は本来この様な方向性を目指すものであろうが、前に挙げた一から三までの研究が伝統文法の専門家以外にも利用できるような円満な実りを齎して、検証可能とならない限り、少なくとも純正な学問としては成立し難いと考え。第二に挙げた Cardona の著作が一つの転機を与えるようなものとなることを期待する。言語の記述に、従って学習・入門に適さない、という点では、いわゆる生成変形文法なども同工であり、先ず、「文法」なるものの定義・分類から始めねばならない。—— この種の研究の一步として、術語の整理・再検証ができるように思われる。周知のように、現代文法学・言語学で用いる術語の多くがギリシア語・ラテン語の伝統文法に縁源を持つ、例えば *Präsens*, *Perfekt*, *Aorist*, *Futur*, *Augment*, *Nominativ*, *Akkusativ*... これらの中には、インド文法が発見した現象を基にしてインド文法の用語から採られ、市民権を得ているものがある：*Vṛddhi* 形成法（名詞語幹のできるだけ語頭に近い位置に印欧祖語段階での **-e-*、インド・イラン語の *-a-* を挿み、語幹末に **-e/o-* [*-a-*] 等の接尾辞を付して、帰属、派生等を意味する二次的名詞語幹を作る形成法、第2節で触れた *brāhmaṇa-*, *brāhmaṇá-* は *bráhman-*, *brahmān-* の *Vṛddhi*-*Ableitung* である）、*Bahuvrīthi* 複合語（*bahu-* は「沢山の」、*vrīthi-* はウルチの源となった語で「米」を意味し、これらから成る、表題に取られた複合語は「沢山の米を所有する」の意味の形容詞となる。この様に *A+B* が「その *B* が *A* により特徴付けられる、*A* であるような *B* をもった」を意味するような名詞複合語の型をパーニニは *Bahuvrīthi* の名で分類した。= 所有複合語、*Possessivkompositum*）。更に、例えば *Metathesis*（音素の入替り、例えば、したつづみ *śitat^sud^zumi* → したずつみ *śitad^zut^sumi*）に対応する術語としてカートヤーヤナは *varṇavyatyaya-* 「字母の入れ替り」を用い、ヤースカ *Yāska*（おそらくはパーニニより後、しかし確実にパタンジャリ以前のインド伝統語源学 *Nirukta* の大成者）は *viparīta-* 「（順繰りに）入れ替った」を用いる。ヤースカは、また、*Anap-*

lyxeに当たる、子音連続の間に発音の便宜上母音が二次的に入る現象を varṇopajana- 「字母の添い生れ」(cf. 独 Sproßvokal 「芽吹き母音」)と呼んで語源解釈のテクニックとして用い、類似の考えはカートヤーヤナに見られる。パタンジャリはこれを斥る(cf. Yāska II 2 ad bharūjā-, Kātyāyana Vārttika 3 ad Pāṇini I 1, 47)。この種の用語・術語、説明道具の総点検から出発して言語学的比較・検証を行う必要を感ずる。現行のインド文法学用語辞典はこの目的には不向きである。

これと関連して、パーニニの方法論、パタンジャリの論理そのものを対象とした理論方面の研究も興味深い。ただでさえ、時代の古さを考えた場合、パーニニの文法は人類の頭脳の可能性にとって偉大な記念碑である。この視点からの研究も歴史的枠組みの中に置いた研究と、一般理論的研究の両面を合せ持つ必要があろう。

第七に、言語に関する哲学研究がある。インド文法学派は後に言語哲学を出現させ(ブハルトゥリハリ Bhartṛhari, A.D. 5-6 C., のスプホータ理論が有名。スプホータ Sphoṭa は観念の中にあり発声によって開顕する語の原型たる「芽」。この語自体は既にパタンジャリが用いている。)、祭事の解釈の哲学的理論付けを事とした、バラモン教正統六派哲学の一、ミーマーンサー Mīmāṃsā 学派は語と意味の問題を中心的テーマとした。他の諸学派も言語を巡る論争に参加している。仏教学派もアポーハ apoha- 「排除」論(語の対象表示機能は他のものの否定・排除に他ならないとする理論。A.D. 5 C.のディグナーガ Dignāga 陳那より始まる)に代表される言語論を展開してこれに加わっている。これらの言語哲学はパーニニ学派の文法学の基礎の上に誕生した。既にカートヤーヤナは語が個物を表示するのか普遍を表示するのかの議論を行い、ヴァーディ Vyādi の個物説を批判するなど、語と意味の本質に関する考察を行っている。パタンジャリはこの面での考察を一層進め、ミーマーンサー学派の言語論等の出発点となった観を呈する。ここでは文法学そのものの議題から離れると見なし、更には触れない。

1.1. インド伝統文法学に関する文献に就いては幸い良い survey が存する:

・ George Cardona の Pāṇini. A survey of research. Mouton (The Hague-Pa-

ris) 1976 = Motilal Banarssidass (Delhi etc.) 1980, xvi + 384 pp. はその時点までの研究史・研究文献を網羅し、項目ごとに要約・紹介したものである。ほぼ同時に

・ Rosane Rocher は *Current Trends in Linguistics*, vol.13 (1975), 3-67 に於いてインド言語学に関する研究史を紹介・概観している。

・ Hartmut Scharfe の *Grammatical Literature (= A History of Indian Literature, ed. by Jan Gonda, V-2, Otto Harrassowitz, Wiesbaden 1977, pp.77-216)* はインドにおける古代語から現代語にいたるまでの伝統文法学とそれに附随する学芸分野の概要を記す。

これら以降の文献の中では上に既に触れた Cardona の *Pāṇini. His work and traditions* が特筆され、一般言語学的観点の入った研究には、 Paul Kiparsky, Madhav Deshpande 等の一連の研究がある。

言語哲学の分野では

・ J.F. Staal が *Current Trends in Linguistics*, vol.5 (1969), pp.499-531 に "Sanskrit Philosophy of Language" を寄稿している。

日本語での紹介には：

・ 辻直四郎 「インド文法学概観」 *ヴェーダ学論集* (岩波書店 1977), pp. 424-477 (= 鈴木学術財団年報 11, 1974, pp.1-28) に伝統文法学の内容とこれに関する研究史の解説と要約があり、インドの伝統的言語哲学に関しては：

・ 服部正明 「言語と意味の考察. 1 総論」 *岩波講座東洋思想*第7巻： *インド思想* 3 (1989), pp.66-83 が概論を与え、以下同書の155頁まで、4人の寄稿者による代表的学派の見解の紹介がある。この分野は我が国のインド(哲学)の中で近年盛んな研究領域である。

Exkurs: Sandhi 及び 「サンスクリット」の正書法について

「サンスクリット」学習者（そして研究者）にとっての難題の一つにサンドゥヒ Sandhi（伝統に従って「連声れんじょう」と訳される）と呼ばれる現象がある。語中及び文中での音の連続に伴って生ずる音素変化の現象である。例えば *ātmanāivātmānamāvarunddhe* という文があれば「他ならぬ自分自身によって自分自身を取囲む／確保する（ことになる）」という意味であるが、単語に分けると、*ātmanā*「自分自身によって」、*evā*「まさしく、…だけ」、*ātmanam*「自分自身を」、*āva-runddhe*「（彼は）取囲む、確保する」から成る。文末の定動詞は *āva*「下へ、離して、しっかりと」と *runddhe*「押し止どめる」から成り、*runddhe* は語根 *rodh/rudh* に *-n-* を挿入して造られた現在語幹の弱形 *ru-n-dh-* に、3人称・単数・現在・直接法・中動態を表す語尾 *-te* が付与されてきたものである。その際、*-dh* と *t-* とが融合して *-ddh-* という有声帯気音になる（Bartholomae の法則、ないし、“buddha-Regel”: *buddha*「目覚めた」 <*budh* + *-ta-*>）。文中の単語と単語の間には *-a + e- > -ai-*（古い段階では *e* は *aj*, *ai* は *āj* と発音された）、*-a + ā- > -ā-*、*-m# + a- > -ma-* の音素融合が見られ、文は単語に分かたれることなく、一連のものとして「書かれて」いる。学習者はこうした音素融合の現象を文法規則として学び、文を単語に分けることができなければ文意の理解に到達できない。

しかし、これらの Sandhi の現象そのものは極めて自然のものであり、おそらく各言語の実際の発音のレベルで常に起こっている類のものである。近代語では実際の発音・聞こえを、その背後にある「標準的」なレベルに、つまり辞書の項目に挙げられているような単語の「原型」に置換え、解釈しながら、聞き取り、理解している訳であるが、この点でも事情が異るとは考えられない。ただ、「正書法」にあたるもののレベルが異なるだけである。われわれの正書法では（歴史的綴り方はまた別のレベルの問題である）、当然、理解のレベルでの出来事が基準になっており、発音・聞こえの実際の実現形が理解のレベルで意識されることは普遍的でない。例えば、英語で *gívmiəbréikfəltí* か、あるいはそれに類するレベルの形が正書法に採られていたとしたら、これから *gív/mí/ə/bréik/fə/tí* <give me a break for tea> を理解・読取することは容易ではない。その場合には、我々は

英文法のはじめに、複雑な音韻法則 Sandhi を学ばねばならないであろう。例えば、この文に限って言えば、語末の v は次の単語の語頭の m に同化される； $\acute{i} + a$ は ia になる（場合によっては、更に、 ja を経て、 $m\acute{i} a$ 自体が $m'a$ と Palatal 化した m と曖昧母音の結合に融合する）といった現象を包摂する規則の体系が必要となる。その他、例えば、 $ná\grave{i}t <night> + ré\grave{i}t <rate> \rightarrow ná\grave{i}r\acute{e}i\grave{t}$, $díd + j\acute{u} <you> \rightarrow díd'j\acute{u}$, $fá(r) + a\grave{u}é\grave{i} \rightarrow fára\grave{u}e\grave{i} <far-away>$ などなど参照。

古インド・アーリヤ語の場合には、 $ná\grave{i}t ré\grave{i}t <night rate>$ から出発しないで、 $ná\grave{i}r\acute{e}i\grave{t}$ が「正書法」に採られていて、これを理解する為の文法事項として Sandhi を学ばねばならない訳である。文字の使用が遅れたことはこのような事態をもたらす大きな要因であったろう。また、発語そのものの形が持つ実現力（魔力）を生業の根幹としていたバラモン階級の言語であったことも預かっていたと思われる。Prāṭisākhya, Śikṣāといったバラモン階級の学者たちの手になる音声学／音素学の精密化は現実の発音・聞取りに近いレベルの堅固な保持の方向へ働いたであろう。文字が無くとも正書法にあたるものは存在する筈で（これを、今仮に「基準像」と呼んでおく。Phonetik-phon と Phonologie-phonem という多分に抽象的な、二つの理論的極の外に、もっと多層的な Spektrum が問題になる（蛇足ながら、いつもそうであるように）、Rgveda の読みを単語に分割したインド最古の文献・言語学者 Śākalya の存在は、「サンスクリット」においても現代語の正書法に近いレベルの言語の姿が基準像に成り得た可能性を示唆する。この方向が押進められていたならば、そして、音素学がこの基準像から実際の発音の現れを導出すという、逆の方向（つまり、現代英語学に見られるような方向）で営まれていたとしたら、学習者が Sandhi の規則に悩まされることは無かったのである。ここでも Pāṇini とその学派が事態の固定に決定的役割を果たしたのかも知れない。

因みに、上述の「基準像」は「サンスクリット」の“native speaker”たちにも当然存在し、これ無しには「サンスクリット」は理解できなかった筈である。tathāgata- が如来 (tathā + ā-gata-)か如去 (tathā + gata-)かといった議論は象徴的である。蛇足ながら、「基準像」は中期インド・アーリヤ語においても大きな役割を担っていたと思われる。中期インド・アーリヤ語では子音の脱落と

同化現象が極端に進み、更に音節構造の制約も加わった結果、例えば「心臓」を意味する古インド・アーリヤ語の *hṛdaya-* は *haaa-* となり、*sattva-*, *sattr-*, *sakta-*, *sapta*, *śākta-* 等は、皆、同音異義の *satta(-)* になってしまう。こうした語形で理解が可能であった背景には、これらの語形を幾分古インド・アーリヤ語よりに戻した「基準像」の存在が考えられないであろうか。丁度、我々が同音異義語を前にして、漢字のおぼろげな像を思浮べて理解の助けとするように。